

豊橋市中央図書館橋良文庫の能楽関係書状

佐藤和道

はじめに

久曾神昇「豊橋地方における近世以前の能楽」（『愛知大学総合郷土研究所紀要』二〇、愛知大学総合郷土研究所、一九七五年）は、室町末期から江戸期にかけての豊橋における能楽の実態を文献史料によって明らかにしたほば唯一の論考である。同稿の江戸期の記述は、吉田藩の御用商人であった植田家伝来の史料によったとされるが、それらは郷土史研究家の近藤恒次を通じて入手したものであったらしい。

近藤恒次は、豊橋市内の高等学校教員として教鞭を執る傍ら三河地域を中心とした郷土史研究に従事し、『東海道新居関所の研究』で東洋大学から文学博士号を授与された。また、愛知大学総合郷土研究所員、『豊橋市史』編集委員などを歴任し、教育・経済・文化など多方面にわたる業績から、「この地方の郷土史研究で恒次の関わりなかったものはない」と評されている¹。近藤の旧蔵資料は、現在豊橋市中央図書館橋良文庫に収蔵されているが、その中には先の久曾神稿が参照したと思われる能・囃子番組の写真が含まれてい

る。² このほかに能楽に関わるものとして、やはり植田家由来と思しき書状の写真三十点が確認できる。これらは、宝生大夫（一〇九）、川合彦兵衛（一一五）、速水猪左衛門（一六〇）、小沢三郎兵衛（二〇〇）から植田を始めとする吉田の町人に宛てたもので、いずれも先の久曾神稿では言及されていない（数字は通し番号で私に付したもので、各書状冒頭の数字と対応する）。これらの史料は、近藤が研究のために植田家所蔵の原本を撮影したものと思われるが、原本の所在が明らかではない現状においては、貴重な史料といえる。まず本稿では、小沢を除く三者の書状（一〇九）を翻刻し、近世吉田における能楽享受の一端を明らかにしたい。³

翻刻凡例

- ・原則として新字体を用いて表示した。
- ・判読不能な文字は□または□で示し、推定される字を（ ）で示した。また、虫損や不鮮明な部分は（ ）で注記した。
- ・句読点、改行などは適宜行い、宛名・差出人・日付等の部分のみ、原本の改行を／で示した。

・花押は（花押）、包紙は（包紙表・裏）とした。
・書状の添書部分は二字下げとした。

一、宝生大夫書状

1～8は吉田町人から宝生大夫に送られた年始の祝賀状に対する礼状で、文面はいずれも定型的なものである。差出人の宝生弥五郎英勝は十四世宝生大夫（将監、権五郎邦保は英勝の娘婿、弥五郎（前名九郎）友于は十五世宝生大夫である。6の書状までは英勝と邦保の連名（4は英勝のみ）だが、7は英勝と九郎友于の連名、8以降は弥五郎友于が差出人となる。これは文化六年四月に邦保が、文化八年十二月に英勝が没したことを受けたものである⁴。9は祖父の死去を受けて大夫を継承した弥五郎友于が、植田二六から祝詞と肴代を送られたことに對する礼状である。友于が家督を継承したのは文化八年十一月であるから、本書状は翌文化九年に書かれたものであろう。

吉田藩と宝生大夫との縁は深く、正徳三年三月五日の松平信祝入国祝賀の宴席に九世宝生友春と十世暢栄（丹次郎）が招かれたほか（『御所替日記』）、安永五年五月十七日には十二世宝生九郎友通の一周忌追善の囃子が吉田の町人によって催されている（前掲久曾神稿⁵）。また「（年不明）霜月十七日付植田七三郎宛小沢三郎兵衛書状」（26）には、春日若宮祭礼勤仕のために宝生大夫が南都へ赴く予定であったが、都合により取りやめとなり、翌年の新能に合わせて下向することになったことを記し、「来春ハ御心懸御出迎等御座

候様兼々御承知可被成候」と述べている。宝生大夫は江戸在住であったが、こうした機会に吉田に立ち寄り、当地の門人と交流する機会をもったようである。

宛名にある植田七三郎は、吉田植田家四世の千穎（宝暦八年）文政元年、通称七三郎、号兎堂）であらう。植田家のもと浜松藩御用達を務めた豪商であったが、享保十四年に藩主松平資訓（本庄松平家）の移封に伴って二世喜右衛門（明鏡）が吉田に移住した。寛延二年に資訓は再び浜松に戻るが、養嗣子の義方（植田家三世、享保十九年）文化三年、通称七三郎）はそのまま吉田に残り、以後吉田藩の出入り商人として重きを為した⁷。義方は安永九年に隠居して榮作と改名、養子であった千穎が跡を継いだ。久曾神稿所載の番組には、安永年間に太鼓を「榮作」、シテを「七三郎」とするものが見える。千穎は能のほか華道、俳諧を嗜み、大須賀鬼卵の『東海道人物志』には「乱舞 俳諧、兎堂 同（植田）七三郎」として名が載る⁸。8・9に見える「植田二六」は千穎の隠居名である。同じく宛名に名を連ねる大山治（次）左衛門は、李仙と号する俳人で、吉田本町に居住した。母は本居宣長の門人で歌人であった大山縫である。『東海道人物志』には「謡」で載り、天明から文化年間に「治左衛門」として囃子などのシテを務めた記録が残る。市川吉左衛門（源造、号五菜）も同様に俳人として知られ、安永から天明三年まで「市川源蔵」、天明五年から寛政年間にかけて「市川吉左衛門」の名で番組に載る。

また、1・2・4に「幾右衛門」、7に「平兵衛」とあるのは宝生大夫と植田らの間を仲介した人物の名であらう。『重修猿蓑伝記』

所収『文化七年猿樂分限帳』には宝生座地謡として

一、御配当七石／御扶持方五人扶持

父角右衛門 命尾幾右衛門 年六十四

一、御配当五石／御扶持方五人扶持

父平兵衛 日吉平兵衛 年五十六

の名が見え、関連が想起される。同様に1の包紙に見える「安田」は、尾張藩お抱えの宝生流能役者安田金三郎を指すものであろうか。いずれも断片的な記述で確証はないが、弟子家の役者が宝生大夫との間を取り持っていた可能性が考えられよう。5の包紙に見える「三度屋」は定飛脚問屋を指す。以下は判読困難で文意が通じ難い。

1 文化元年二月十六日付 植田七三郎・大山治左衛門・市川吉左

衛門宛 宝生弥五郎英勝・宝生権五郎邦保書状

(包紙表) 植田七三郎様／市川吉左衛門様 宝生弥五郎

(包紙裏) 文化元甲子三月二日安田より来候

為年始之御嘉儀幾右衛門等迄預御札致拝見候。弥御安榮珍重御事御座候。此方無異儀致加年候。早々御札忝。右御報迄如此御座候。猶期永日之時候。恐々謹言

二月十六日 宝生弥五郎 英 (花押)／同権五郎 邦保 (花押)

植田七三郎様／大山治左衛門様／市川吉左衛門様

2 (年不明) 二月十三日付 植田七三郎・大山治左衛門・市川吉

左衛門宛 宝生権五郎邦保・宝生弥五郎英勝書状

為年頭之御嘉儀幾右衛門方迄預御札忝存候。弥御平安被成御越年珍重之御事二御座候。右御報迄如斯二御座候。恐惶謹言

二月十三日 宝生権五郎 邦保 (花押)／宝生弥五郎 英勝 (花

押)

植田七三郎様／大山治左衛門様／市川吉左衛門様

3 (年不明) 正月二十八日付 植田七三郎・大山次左衛門・市川

吉左衛門宛 宝生弥五郎英勝・宝生権五郎邦保書状

為改陽之御嘉儀預御札致拝見候。弥御平安被成御越年珍重御儀御座候。当地無事致加年候。可御意易候。早々御札忝右御報迄如斯御座候。恐々謹言

正月廿八日 宝生弥五郎 英 (花押)／同権五郎 邦保 (花押)

植田七三郎様／大山次左衛門様／市川吉左衛門様

4 (年不明) 正月晦日付 植田七三郎・大山次左衛門・市川吉左

衛門宛 宝生弥五郎英勝書状

為年甫之御嘉詞幾右衛門等迄預御札致拝見候。弥御堅固御越年珍重奉存候。此方無事致加年候。早々御札忝右為御報如是御座候。恐々謹言

正月晦日 宝生弥五郎 英勝

植田七三郎様／大山次左衛門様／市川吉左衛門様

5 文化六年正月廿三日 大山次左衛門・植田七三郎宛 宝生弥五

郎英勝・宝生権五郎邦保書状

(包紙表) 大山次左衛門殿／植田七三郎殿 宝生弥五郎
(包紙裏) 文化六己巳三月六日三度屋ヨリ届／但初□□□□(度限

二以) □□□□ 〈原本不鮮明、虫損アルカ〉

為年甫之嘉儀芳札令披見候。弥御無異被致越年珍重存候。此地無異致加寿候。可御心易候。早々芳札忝右為返報如此候。猶期永日之時候。恐々謹言

正月廿三日 宝生弥五郎 英勝 (花押) / 同権五郎 邦保 (花押)
大山次左衛門殿 / 植田七三郎殿

6 (年不明) 二月七日付植田七三郎・大山次左衛門宛 宝生弥五郎英勝・宝生権五郎邦保書状

為年甫之嘉儀預御札致拝見候。弥御平安御越年目出度御事候。此地無異致加年候。早々預示忝。右返報如此御座候。恐々謹言

二月七日 宝生弥五郎 英勝 (花押) / 同権五郎 邦保 (花押)
植田七三郎様 / 大山次左衛門様

7 (年不明) 二月十一日付大山次左衛門・市川吉左衛門・植田七三郎宛 宝生弥五郎英勝・宝生九郎友于書状

為御年賀平兵衛等迄預御札致拝見候。弥御平安御越年珍重御事御座候。当方無異罷在候。御意易可被思召候。早々御嘉詞忝。右御報迄如此御座候。恐々謹言

二月十一日 宝生弥五郎 英 (花押) / 宝生九郎 友 (花押)
大山次左衛門様 / 市川吉左衛門様 / 植田七三郎様

8 (年不明) 二月十八日付植田二六宛宝生弥五郎友于書状
為改年之御祝詞御札致拝見候。弥御平安被成御超歳珍重御事御座

候。下拙義無異致加年候。可御意易候。右御報迄如此御座候。恐惶謹言

二月十八日 宝生弥五郎 友于 (花押)
植田二六様

9 (年不明) 六月二十九日付植田二六宛宝生弥五郎友于書状

御札致拝見候。就者今般拙者義家督相統被 仰付候二付、御祝詞御札并為御肴代南簾一片被掛御意忝。右御報迄如此御座候。恐惶謹言
六月廿九日 宝生弥五郎 友于 (花押)
植田二六様

二、川合彦兵衛書状

川合彦兵衛は、金春流太鼓役者。『重修猿樂伝記』所収の「金剛座分限帳(天保十四年)」に「一、御扶持方五人扶持 太鼓 父彦兵衛 川合彦兵衛 明五十五歳」と記載される。同書所載の『文化七年猿樂分限帳』にも金剛座付として「一、御扶持方五人扶持 太鼓 父彦兵衛 川合定五郎 生十二」とある。年齢からして、文化七年の川合定五郎と天保十四年の川合彦兵衛は同一人物であろう。代々「彦兵衛」を名乗り、金剛座付であった。

宛名の植田七三郎・栄作は、先述した植田家三世の義方である。義方は文化人として知られ、遠戚に当たる賀茂真淵に国学・和歌を学んだほか、俳諧・漢詩文にも堪能で、紀行家として知られる菅江真澄は義方の門人である。能については、寛延二年六月に川合彦

兵衛の仲介を得て金春惣右衛門国憲に師事、『東海道人物志』にも「漢学 国学 大鼓（太鼓の誤記か） 名義方 字子植 号一蓬舎 古帆 植田栄作」と記載されている¹¹。本史料が義方に宛てたものであれば、10の「丁酉」は安永六年、12の「乙巳」は天明五年ということになる。先述のように義方は安永九年に隠居して栄作と改名しており、この点も10が「七三郎」、12が「栄作」と表記されている点と合致する。この場合、『重修猿蓑伝記』所載の川合彦兵衛（完五郎）の父に当たるのが、差出人の川合彦兵衛国英であろう。

内容は先の宝生大夫の書状と同じく、年始状に対する礼状で文面も定型的なものが多い。宝生大夫同様、川合彦兵衛自身は江戸在住のため、通常は直接稽古を受ける機会はなかったと思われる¹²。後掲の書状にあるように、普段は尾張在住の太鼓役者速水猪左衛門の指導を受けていたのではなかろうか¹³。ただし、10には「近年之中御出府之由被仰下大慶仕候、必々近々ニ御出府奉待候、勿論暫御逗留之御積ニ而御出可被成候」と記されており、植田自身が江戸へ赴くこともあったらしい¹⁴。

10 丁酉年正月二十六日付植田七三郎宛川合彦兵衛国英書状

（封書表） 植田七三郎様 貴報 川合彦兵衛

（封書裏） 丁酉二月六日至 自江府

猶々家内江御加筆被下忝。則申聞候処又々宜敷御礼申上候。且又近年之中御出府之由被仰下大慶仕候。必々近々ニ御出府奉待候。勿論暫御逗留之御積ニ而御出可被成候。其節ハ緩々期貴意可申上候。以上

如仰改年之御慶目出度申納候。先以御障茂無御座御越年被成珍重奉賀候。随而為年甫之御祝詞御扇子料銀子沓封被掛貴意忝幾久祝納仕候。毎度御厚情之段不浅次第奉存候。猶御礼等期永日之時候。恐惶謹言

川合彦兵衛 国英（花押）

正月廿六日／植田七三郎様 貴報

11（年不明）二月二十日付植田七三郎宛川合彦兵衛国英書状

猶々被入御念御端書家内へも御加筆被下候忝。則申聞候処宜敷申上度旨申居候。

貴札致拜見候。如仰改年之御慶御同意目出度奉存候。先以愈御安全被成御越年重畳目出度奉存候。随而当方無異儀嘉年仕候間乍慮外貴意易思召可被下候。然者年頭御扇子料白銀沓包被掛貴意忝。毎度遠路之处被掛御心御叮嚀之段、不浅忝仕合幾久敷祝納仕候。尚期永日之時萬々御礼可申上候。恐惶謹言

川合彦兵衛 国英（花押）

二月廿日／植田七三郎様 貴下

12 乙巳六月十六日付植田栄作宛川合彦兵衛書状

（包紙表） 三州吉田二而／植田栄作様 無別条貴答 川合彦兵衛

（包紙裏） 乙巳六月廿三日至 封 從江府

追而啓上仕候。誠ニ以從是ハ大御無音仕候段真平御用捨可被下候。年々不相替被掛御心頭御状被下候段千萬之忝仕合奉存候。彼は仕候而去年も御返状進上仕、扱々令不埒候段幾重ニも御用捨可被□

(成) 下候様奉頼上候。春中より彼是取込漸此節少々手隙二相成候二付、大延引ながら貴答仕候。暑氣之時節二も相成候間折角御凌可被成候。江戸表ハ当年殊之外暑も強雨一向ふり不申候。其御地ハ如何御座候や。随分御いとひ可被成候。呉々も失礼之段御用捨可被下候。申旨旁如此御座候。以上

彦兵衛

六月十六日／榮作様

尚々年末筆御家内様へも宜敷御達可被下候。奉頼候。以上

13 (年不明) 三月二十六日付植田榮作宛川合彦兵衛国英書状

年頭之為御祝詞貴札致拝見候。先以御揃御安全被成御重歳珍重奉賀候。次二当方無異儀嘉年仕候。乍慮外御案意可被下候。且又御扇子料白銀壹封被掛貴意誠二不相替遠路御厚情被成下忝幾久敷祝納仕候。先は右御札御答旁如此御座候。尚期後便時候。恐惶謹言

三月廿六日 川合彦兵衛 国英 (花押)

植田榮作様 貴報

尚々家内へも御加筆被成下忝。尚又宜敷申上候へく候。早々以上

14 (年不明) 六月十六日付植田榮作宛川合彦兵衛国英書状

貴札致拝見候。如仰改年之御慶目出度申納候。先以御揃御安全被成御重歳珍重奉賀候。次二当方無異儀嘉年仕候。乍慮外御案意可被下候。且亦為御年玉御扇料白銀壹封被掛貴意幾久敷祝納仕候。誠二遠路不相替被為掛御心之段、不浅次第奉存候。右御返答如此御座

候。尚期後便時候。恐惶謹言

六月十六日 川合彦兵衛 国英 (花押)

植田榮作様

猶々家内へも御加筆被成下忝。尚又可然様御札申度由申聞候。以上

15 (年不明) 三月十三日付植田榮作宛川合彦兵衛国英書状

貴札致拝見候。如仰改年之御吉慶目出度申納候。先以御家内御揃御安全二被成御越年珍重奉賀候。并二当方無異儀嘉年仕候間、乍慮外御案意可被下候。且又為御扇子料銀子壹包被掛貴意忝幾久敷祝納仕候。誠二遠路不相替被掛御心頭之段、不浅忝奉存候。右御札御返答旁如斯御座候。恐惶謹言

三月十三日 川合彦兵衛 国英 (花押)

植田榮作様

猶々御端書之趣承知仕候。被人御念之由忝奉存候。尚又家内も宜敷御札申上候。以上

三、速水猪左衛門書状

速水猪左衛門は、尾張藩お抱えの金春流太鼓役者。蓬左文庫蔵『藩士名寄』によれば、宝永七年に初世猪左衛門(初名平次郎)が切米四十石、五人扶持で召し抱えられており、その嫡孫にあたるのが、差出人の猪左衛門義信(三世)である。以下、同書より該当部分を引く。

御役者太鼓

猪左衛門

速水猪左衛門^半

平次郎

速水^{猪六郎}

御切米三十石

御扶持^{毎石四人分}

一宝暦五亥二月十九日、御憐愍を以御役者^二被 召抱、金式枚被下置

猪六郎儀、江戸御扶持三人分・尾州^二御用相勤候節、式人分被下答

一宝暦七丑十二月、平次郎^与改名

一明和七寅二月五日、家芸令出精候付、御切米拾八石被成下、

江戸詰扶持四人分・尾州^二御用之節三人分被下答

一安永九子四月朔日、御加増米五石被下、都合御切米式拾三石被成下

一天明元丑十一月晦日、男子無之^二付、依願時斗時悦末子松次郎儀、養育為致候様申渡有之

一同年十二月、猪左衛門^与改名

一同六寅二月、男子無之^二付、大坂表^二罷在候弟橋本三左衛門末子虎市儀、養育致度、願之通済

一同八辰十月、養育虎市儀、養子致度、願之通済

一寛政十午正月十六日、御加増米七石被下置、都合御切米三拾石被成下

一文化五辰四月六日、病死

速水平次郎養育

速水松次郎

(朱)「実時斗時悦末子」

天明元丑十一月、速水平次郎依願、養育相成

16、17に見える「松次郎」は、右傍線部分にあるように猪左衛門の養子であつたらしく、書状内に大坂や江戸に修業に遣わしたことが記されている。しかし、18には松次郎が病死したことが見え、当てがれば養子を都合するよう依頼している。その後、二重傍線部分にあるように、天明六年に橋本三左衛門末子の虎市を養子とした。橋本については『改正能之訓蒙図彙』（宝暦十二年刊）に太鼓金春流として「大坂 平の町／せんたん西へ入／橋本三左衛門」とある。¹⁶『藩士名寄』の「弟」とあるのが事実であれば、猪左衛門義信の実弟が橋本家に養子として入り、今度は逆に橋本の末子を速水家に迎えたと考えられる。また、これにより18の書状は天明六年以前のものと判明するが、恐らくこれら一連の書状は、天明三年から数年のうちに書かれたものであろう。なお『藩士名寄』によれば、文化五年に猪左衛門義信が病死した後、虎市が父の跡を継いで召し抱えられ、四世猪左衛門を名乗っている。

文面に名に見える植田栄作は既出の植田義方、七三郎は植田千穎であらう。一方、植田平四郎は、別家筋に当たる植田青柯（寛延三年〔文化十一年〕）である。¹⁷青柯は吉田藩主松平資訓の庶子として生れ、家老岩代忠左衛門に預けられた後、植田家二代喜右衛門の養子となり高須新田に別家を立てた。華人として知られ、松月堂古流の是心軒一露に学び、百名を超える門弟を有したという。久曾神稿所収番組には、安永から文化年間にかけて太鼓に「平四郎」が出演しているのが見える。

速水の書状は、先の宝生大夫、川合彦兵衛と異なり、長文で内容も多彩である。以下、書状の内容についてはそれぞれに解題を付した。

16 天明三（癸卯）年正月二日付 植田栄作・平四郎宛速水猪左衛門義信書状

（包紙表） 三州吉田二而／植田栄作様 速水猪左衛門／貴下
（包紙裏） 正月二日／癸卯正月九日至（別筆）／從尾州

尚々其後者御無沙汰罷過候。其段御用免被下候。将又私儀も又々九月廿六日当地発足仕、松次郎召連候而大坂表罷登候。霜月二日当地より帰国仕候。倅儀者先々為修行之一兩年も大坂二指置申候。来ル三月高安彦太郎一代能興行相極り申候。去年とハ違ひ一向不景氣之趣ニ相見へ申候。何も又々可申上候。今日者諸方互通取込早々申上候。以上

改年之御吉慶不可有休期御座目出度申納候。其御地御揃愈御安全可被成御越歳候間、重疊目出度御儀奉存候。私儀無異迎春仕候。乍慮外御安意可被下候。先者年頭御祝儀申上度如斯御座候。猶期永日之時候。恐惶謹言

正月二日 速水猪左衛門 義信（花押）
植田栄作様／同平四郎様 貴下

年始の祝賀状で本文は典型的なものであるが、添書の部分に子息松次郎とともに大坂へ赴いたこと、一月ほど逗留して名古屋へ戻ったが、子息はそのまま修業のために留め置いたことが記される。文中に見える高安彦太郎はワキ方高安流家元の通り名である。『勧進能并狂言尽番組』によれば、天明三年三月二十七日より六日間、難波新地にて高安彦太郎の勧進能が興行されており、同解題によれば十二世彦太郎信均が該当する。また、番組には勧進能三日目の〈大

江山〉に「速水松二郎」の名が見える。『改正能之訓蒙図彙』によれば、大坂在住の金春流太鼓方には、先述した橋本三左衛門のほか、村岡忠兵衛、今村左一郎、小寺庄五郎、中川嘉平次などがいたが、橋本が速水の実弟であれば、松次郎は橋本の下で修業した可能性が高い。

なお、前年の天明二年四月六日には金春惣右衛門（国惟）の勧進能がやはり難波新地で行われており、二日目の翁付〈白楽天〉に速水猪左衛門の名がある。この時惣右衛門は、大坂へ向かう途中の三月七日に吉田の植田宅に逗留し、義方に〈乱〉を伝授したという。義方もまた三月二十四日から五月二十七日まで勧進能見物のため大坂に赴いている。文中に「去年とハ違ひ」とあるが、この「去年」は惣右衛門の勧進能のことを意味するのではなからうか。ただし右書状で大坂に赴いたのは前年の九月と記しており、これは勧進能への出演とは無関係のようである。

17（年不明）二月廿七日 植田栄作宛 速水猪左衛門 義信書状

一筆啓上仕候。先以久敷打絶以書状茂不申上御無沙汰罷成候段御免可被下候。時分柄追而暖氣ニ相成候得共御揃愈御安衛被成御座候哉、承度奉存候。当方無異罷在候。乍憚御安慮可被下候。誠二旧年者以書状申上候共其外申上候。江戸表より八木重三郎ト申者之儀ニ付御返事ニ委細被仰下忝奉存候。尤右之趣ニ付江戸師家江茂申遣候所、返答申参候ニハ貴公様江茂右重三郎一件委細師匠方より申参候由承知仕候付、御再答も不申上候而失礼仕候段呉々御免可被下候。将又同役諸井源兵衛儀去年冬より当地ニ逗留二而御座候共、此度帰

府ニ付幸能同道人故松次郎儀相頼指下申候。尤先々江戸表ニ永ク逗留為致修行為仕候積ニ御座候。貴宅江立寄御覧申上候様ニ申付遣し申候儘、此度定而乍立鳥渡御見廻可申上候儘、乍御面働御会可被下候様奉頼上候。尤至而慇成松次郎ニ而御座候故、江戸表江指下候茂御存之通之師匠故旁案し罷在候。何卒首尾能修行為仕度奉祈候。尤此方ニ而茂随分敷敷申付遣候得共、猶又乍憚無御遠慮御申付被遣下候様幾重も厚く奉頼上候。將又至而御深切ニ被成下候故申上候。此度修行下ニ付国主より茂雑用金儀格別ニ結構ニ被申付冥加ニ相計難有仕合ニ奉存候。夫故此度罷下候ニ付格別之私方失費も無之修行為致候事ニ御座候得者、格別ニ出情上達仕候様仕度旁御頼申上候事ニ御座候。松次郎御地通り掛ニ乍立御会被下候ハ、乍憚無御遠慮随分出情仕候様御申付可被下候。呉々奉頼上候。先々右御頼申上度任序ニ御覧旁如斯御座候。今日甚取込罷在候故早々申上殘候。乍末筆七三郎様江茂宜御伝上可被下奉頼上候。何茂近内緩々可申上候。以上

二月廿七日 速水猪左衛門

植田栄作様 貴下

尚々平四郎様江茂以書狀申上度奉存候共、今日甚取込罷在候故不能其儀候。乍憚宜御伝上可被下候。奉頼候。且又家内之者共も宜申上候様申聞候。何茂又々可申上候。以上

文中に見える「八木重三郎」は不明の人物。「江戸師家」とあるのは金春物右衛門であらう。八木に關し、金春家より速水を通じて何らかの照会があったと推測される。また「諸井源兵衛」は、尾張

藩お抱えの観世流太鼓役者である。『藩士名寄』（徳川林政史研究所蔵）には、

【源兵衛悖】

太鼓

諸井西之丞

寛政十（一七九八）年九月廿二日 源兵衛

一 寛政十年九月十七日、親跡御役者被召抱、御切米貳拾石被下置、江戸御扶持方四人分・尾州三人分被下置（以下略）²⁰

とある。本書は内容的に天明年間のものと考えられるので、右の西之丞（源兵衛）の父に当たるのが、書狀の「諸井源兵衛」であらう。また後年の資料ではあるが『安政五年戊午改分限帳』（藤田家蔵）に「米 貳拾石 江戸住／御扶持 江戸四人分／尾州三人分／観世流太鼓／諸井金太郎／当午ニ三十歳」とあるように、通常は江戸在住であつたらしい。²¹ その諸井が前年冬から名古屋に逗留していたが、再び江戸に戻るのに際し、子息松次郎を同道させ江戸の師家で修業させることにしたものである。「貴宅江立寄御覧申上候様ニ申付遣し申候」とあり、松次郎に江戸へ向かう途中で吉田の植田宅を訪問するよう申付けた旨を記す。また「国主より茂雑用金儀格別ニ結構ニ被申付」「私方失費も無之修行為致候」などであることから、尾張藩主から江戸で修業するための資金も提供されたらしい。そのため松次郎と面会した際には「無御遠慮随分出情仕候様」申付けるよう依頼している。

18 (年不明) 十一月廿九日 植田栄作宛速水猪左衛門義信書状

被為思召寄御懇書被下忝拜見仕候。時分柄寒冷甚數御座候得共御揃愈御安衛被為人候而珍重御儀奉存候。当方私儀無異事罷在候。乍憚御安慮可被下候。乍然先頃より只今以持病之痔疾指発久敷着座難仕候二付、先日より御答も不申上候而失礼相成候段呉々御免可被下候。将又先日ハ四日市西村氏御近辺江御參之事、其御地江茂立寄被申候而私方様子茂御聞被下候由忝奉存候。如仰之倅儀不存寄落命仕私儀甚当惑仕候。当春東武表より指下候へハ師家二而茂芸甚氣二入申候由、追々御申越候二付私儀甚安心仕罷在候共、誠二不存寄事二相成師家二而茂殊之外残念之趣二申參候。尤病中坏茂師匠自身かいほう随分／＼無如才致被呉候由、外々よりも具二承扱々残念仕候。将又私儀茂来年五拾才二相成候故又々急々養子茂仕度候得共、何方二も當時心当テ無御座扱々心痛仕候。勿論御如才ハ御座有間敷奉存候へとも、若思召当茂御座候ハ、御聞合可被下候。幾重茂奉願上候。尤江戸表大坂江も相頼遣候得共、右方二茂一向心当テ無御座趣甚当惑之由申參候事二御座候。将又其御地此年乱舞如何二御座候哉。当所者殊之外時行仕能も度々催御座候。はやし者毎日の由承申候。夫故稽古人茂多く聽而別而取込罷在候。呉々被為思召寄御深切之預御状、幾重茂宜御礼申上度忝奉存候。七三郎様より茂御懇之御伝書是又忝奉存候。乍末筆宜御礼被仰上可被下奉願上候。先々右御礼共申上度如此御座候。何茂後より重便二申上候。以上

十一月廿九日 速水猪左衛門
植田栄作様 貴下

子息松次郎が病気で急逝したことを記す。「四日市西村氏」のもとを訪れた植田は、そこで速水の様子を聞き合わせたらしい。速水は、持病の悪化による返答の遅れを詫びるとともに「深切之預御状」に対する礼を述べている。17に松次郎を江戸修業に遣わしたことが記されていたが、春に国元へ一時帰国した際には「師家二而候茂芸甚氣二入申候」と評され、速水も「甚安心」の様子であった。その後江戸に戻るも病状が悪化し、「師匠自身かいほう」にも関わらず亡くなったようである。これにより新たに養子を迎える必要が生じたため、植田にも当てがあれば紹介するよう依頼している。先述のように、天明六年二月に橋本三左衛門末子虎市を養子に迎えているため、本状はそれ以前に書かれたものと考えられる。また、植田栄作（義方）は安永九年に隠居した後、伊勢を度々訪れている。近藤恒次作成の年譜によれば、天明三年・四年・五年・寛政元年・十年に伊勢参宮に赴いており、天明五年九月には松阪の本居宣長を訪ねている。こうしたついでに四日市を訪れる機会があったのであろう。一方の速水も、19に「且私儀八月中旬より勢州辺江罷越候而」と記すように、やはり伊勢を訪れる機会があった。「西村氏」の素性は明らかではないが、両者をよく知る人物が当地に在住していたのであろう。なお、文中に「私儀茂来年五拾才二相成候」とあるので、ここから逆算すれば猪左衛門義信の生年は元文元年と考えられる。このほか「当所者殊之外時行仕能も度々催御座候、はやし者毎日の由承申候」として、名古屋では能や囃子が盛況であったことを伝える。

19 (年不明) 九月廿九日付 植田栄作宛 速水猪左衛門義信書状

先達而者度々預御懇書忝拝見仕候。時分柄冷氣相増候得共御揃愈御安衛被成御座候由珍重御儀御座候。当方無異事罷在候。乍慮外御安意可被下候。從此方者彼是多用取紛久々御無沙汰貴答茂不申上扱々失礼無申分ヶ仕合幾重茂御高免可被下候。誠ニ当度能之節者平四郎様并に七三郎様当方江御越緩々奉得貴意如何斗大慶忝奉存候。殊更平四郎様御越被下候故、私方出勤仕候節何角御世話共ニ相成誠ニ賑々敷相勤申候而外聞旁十万忝仕合奉存候。将又平四郎様当地江御越之節被為思召寄珍々敷干魚被掛貴意、近比く御厚情之段千万忝仕合奉存候。右御礼も早速不申上失礼仕候段呉々御高免可被下候。

七三郎様ニ茂但馬江御湯治御越被成候由承知仕候。定而御安衛御帰郷可被成候と目出度奉存候。且私儀八月中旬より勢州辺江罷越候而九月節旬前に帰宅仕候。彼地も当秋者作方宜候而甚景氣宜御座候。乱舞も相応ニ時行仕候。当方者益後より乱舞時行不仕候得共先々世上ゆるみ申候趣太慶仕候。誠ニ当度能之節者度々雨天。平四郎様ニ茂御逗留永く相成御退屈被成候御事□(一)甚氣之毒仕候。其後御安衛御帰郷被成候趣呉々悦敷奉存候。先々余り御無沙汰申上候故貴報御礼御見舞旁如斯御座候。猶重便ニ萬々可申上候。乍末筆七三郎様平四郎様江も宜御伝上□(可被下)奉願上候。恐惶謹言

九月廿九日 速水猪左衛門
植田栄作様 貴下

尚々当所倅・家内之者も宜申上候趣申聞候。幾重も御無沙汰仕候段御免可被下候。以上

七三郎・平四郎が速水の出演する能に合わせて名古屋へ赴いたことに対する礼状。「私方出勤仕候節」とあるので尾張藩主の催しに出勤したらしい。また「当度能之節者度々雨天平四郎様ニ茂御逗留永く相成御退屈被成候」とあるのが雨天による催能の延引を意味するのであれば、野外の催しだった可能性がある。具体的な公演を特定できないが、町入能のような町人の観覧を許す催しが行われたのではないか。この時平四郎は「珍ら敷干魚」を持参したとあるが、これは吉田の中心地であった魚町に魚問屋が多く軒を連ねていたことと関係していよう。吉田の魚市場は安海熊野神社境内に設けられ、元禄期の藩主小笠原長重は、新居宿から伊良湖岬にいたる遠州灘一帯の魚を吉田の魚問屋以外で売買することを禁止した。享和二年の記録によれば、吉田城下の魚問屋は十三軒、魚仲買五十八軒、肴屋九軒であったが、これらの大部分が魚町にあったという。また「七三郎様ニ茂但馬江御湯治御越被成候」とあり、この後城崎あたりまで赴いたのである。一方速水は八月中旬から九月上旬まで伊勢に滞在していた。「彼地も当秋者作方宜候而甚景氣宜御座候、乱舞も相応ニ時行仕候」とあるように、伊勢でも能(囃子)が盛んであった由である。また添書に「当所倅家内之者」とあるが、この「倅」が松次郎を指すのか、虎市を指すのか判然としない。なお本状と直接の関連はないが、寛政十二年閏四月に植田義方は、小野久作・富田市太郎・大山次左衛門・供西甚助とともに名古屋に赴き、六日間わたって能を見物している。²⁵

四、本史料によって得られた成果

(一) 吉田藩と宝生流の関係について

近世の吉田藩が採用していた流儀については明確な証拠となる史料がない。吉田藩では江戸初期以来短期間で主家が交替し、寛延二年の大河内松平家の入封によってようやく藩主が定着した（正徳二年に大河内松平家の信祝が吉田に移封されたが、享保十四年に浜松藩に転封されている）。だが、大河内家の分限帳にはお抱え能役者らしき人物が見当たらず、吉田城内にも能舞台は存在しなかった。現存する史料にも藩の公的な催しはごくわずかしが記録されていない。

そうした中で、現在魚町能楽保存会の所有となっている吉田藩旧蔵の能面について、田辺三郎助は以下のように指摘する。

能面の種類として、この一群はかなりよく揃っているが、たとえば女面の類で若女や節木増、深井等が含まれておらず、金春の面を写すと銘記するもの四面（小尉（二二）、小面（一五）、曲見（二〇）、喝食（不出品））をはじめ、金春流の面の写しと思われるものが多いのは、この群の特色であろう。それは大河内家の能が金春流であったことを示唆しているように思われる。²⁶

一方、維新の混乱期にこれらの能面・能装束の保存に尽力した魚町の小久保彦十郎は、尾張藩お抱えの宝生流大野藤五郎に師事したとされ、近代以降の豊橋では宝生流が主流であった。従来はそれが

江戸期の実態を反映したものであるとする確証はなかったが、今回紹介した宝生大夫書状の存在により、少なくとも町方では宝生流が採用されていたことがほぼ確実となった。この点に加え、正徳三年の松平信祝入国祝賀に宝生大夫が臨席していた事実などを考えれば、藩としても宝生流を採用していた可能性が高いように思われる。ただし、大河内家文書には、喜多十大夫が江戸詰の吉田藩士岡本十左衛門に宛てた『能番組之書様』なる書物が残されているなど、宝生以外の流儀とのつながりがあった可能性も残されている。

なお、『豊橋市史』第三巻は、明治期の豊橋の能楽について「家元からの束縛などあまりなかった当時は、上演演目の多様を競って楽しんだ」と指摘しているが、逆に家元とのつながりを保持していた当時は、中央からの統制を受けることもあった。²⁷五月八日付大山定治郎・市川源兵衛・植田七三郎・高橋仁吉宛小沢三郎兵衛書状（21）には、笛方藤田家や大鼓方石井家など、名古屋在住の役者と江戸の役者の間に申合せがない事を理由に、予定していた（道成寺）の上演を取りやめざるを得なくなったことが記されている。一方（年不明）十二月十八日付植田七三郎宛小沢三郎兵衛書状（23）には催能に際して不足する装束を京都から借り受ける旨の記述が見える。小沢三郎兵衛は、植田の師匠格に当たる人物で、名古屋近辺に在住し、江戸の宝生宗家や京都の役者との連絡を仲介する立場にあったと思われる。この点については稿を改めて詳述するが、明治期には、中央の能界も維新によって混乱しており、そうした関係も途絶していたと推測される。

(二) 植田家を中心とする吉田町人の文化について

本史料の多くに登場する植田義方（七三郎・栄作）は、若年から金春惣右衛門に師事しただけでなく、姻戚関係にあった賀茂真淵から国学・和歌を学び、詩文は京都の大江玄圃に、俳諧はやはり京都の五升庵蝶夢に師事した。ほかにも吉田の町人の中には、本居宣長・賀茂真淵に国学を学んだ鈴木梁満や、植田とともに蝶夢らに師事して蕉門俳諧を吉田に広めた古市木朵のように江戸や京都の文化人と交流があった例が認められる。本史料からも、宝生大夫や川合彦兵衛ら江戸の能役者との交流関係が存在したことが明らかとなった。

吉田の町人が中央の能役者と関係を構築し得た要因として、第一に文化や学問に費やすことのできる資産を有する富裕な町人が多く存在したことが挙げられる。先述のように9には、宝生大夫就任に際し「南鐐一片」を、10・11・13・15には年頭に「白銀壺封」を送っていたことが記されている。また、「（年不明）十二月十五日付大山次左衛門・植田七三郎・市川源蔵・高橋仁吉宛 小沢三郎兵衛叙庸書状」（20）、「東武」（宝生大夫か）からの依頼で「南鐐一片」を送ったことが言及されている。こうした記述は、吉田の町人が能役者の経済的な後援者であったことを示すものといえよう。

第二の要因として、吉田が東海道の街道筋に位置し、江戸・京都や名古屋と往来する機会を持ち得たことが挙げられる。近藤恒次は、植田義方が京都・名古屋・伊勢などに頻繁に赴き、その途中で能を見物したり、能役者と面会したりしていたことを指摘してい

る。²⁹ 一方、江戸に行く機会はそれほど多くあったわけではなからうが、先述の通り、逆に宝生大夫や金春惣右衛門が大坂・奈良へ赴く途中に吉田に立ち寄ることがあった。

吉田と同様に町人が催能の中心となった例としては、同じ東三河の新城が挙げられる。新城では元文元年以来領民が天王社（現富永神社）に能を奉納するのが恒例となり、江戸期を通じてほぼ間断なく行われていた。³⁰ 当初能の指導は遠州三ヶ日（現浜松市北区）に居住した服部源右衛門（友清）、囃子は八名郡大野村（現新城市大野）の梶村恒右衛門が務め、両者の死後は、伊勢の中川友八（シテ）・勝田記内（シテ）、及び名古屋の西村庄十郎（脇）、早川幸八（狂言）に引き継がれたという。また、江戸期の祭祀能番組に記載された新城以外の出演者は、吉田・名古屋・岡崎・浜名（浜松）など近隣地域が大半を占めている。それ以外では、先述の中川・勝田ら伊勢が数例、江戸も小鼓方の観世惣三郎ら数例があるのみである。伊勢は遠方ではあるが、三河湾及び豊川舟運による水路によって往来が可能であった。新城で採用されていた喜多流の役者が名古屋にいなかったための措置であろう。新城では、吉田の場合と異なり、江戸や京都といった中央との関係はほとんど見出せない。東海道から離れた山間部に位置し、規模の小さな集落であったことから、近隣地域との関係を重視していたと思われる。

一方、吉田藩の隣藩である田原藩では、元禄期の藩主三宅康雄が能を好み、私的な催しに加え、藩内の領民を招いて催能を行っていたことが知られる。³¹ 田原藩も吉田藩同様に抱えの能役者は存在しなかったようで、少なくとも国許での演能は藩主及び藩士によって

運営されていた。また文化年間に創設された藩校成章館では、年二回の積奠（孔子を祭る祭礼）に藩士による舞囃子を行うのを恒例とした。このほか江戸後期の藩主三宅康直は、代々金剛流を採用していた姫路酒井家からの養子であったが、自身も金剛大夫から稽古を受けていた。このように田原藩では能楽は積極的に振興されていたようであるが、その担い手はいずれも藩主や藩士であって、町人以下の領民に能や謡が流行していたことを示す史料は管見に入らない。町人が能の担い手の中心となった吉田とは異なる状況であったといえる。逆に吉田において藩が主体となった催しが少なかったことは、吉田藩主が老中をはじめとする幕府の要職に任じられることが多く、江戸に在住する期間が長かったことが影響していた可能性があるであろう。

註

- 1 『郷土豊橋を築いた先覚者たち』郷土豊橋を築いた先覚者たち編集委員会編、豊橋市教育委員会、一九八六年、『豊橋百科事典』豊橋百科事典編集委員会編、豊橋市文化市民部文化課、二〇〇六年。
- 2 原本を撮影した写真（又はそのコピー）を冊子として綴じたものらしい。本稿で紹介した書状類も同様の体裁である。
- 3 本史料の概要は『東海能楽研究会年報』二四号、東海能楽研究会、二〇二〇年において報告した。本稿とは内容が一部重複する部分がある。

4 片桐登校訂『能楽資料集成一一 重修猿楽伝記 文化七年猿楽

分限帳』野上記念法政大学能楽研究所編、わんや書店、一九八一年。

5 『御所替日記』は、豊橋市民文化会館蔵。『豊橋市史第六巻 近世史料編 上』、豊橋市史編集委員会編、豊橋市、一九七六年に翻刻掲載。

6 『近世近代東三河文化人事典』東三河文化人名事典編輯委員会編著、未刊国文資料刊行会、二〇一五年。

7 先掲『郷土豊橋を築いた先覚者たち』。

8 『東海道人物志』享和三年版の復刻、塚本五郎、一九五四年。

9 先掲『重修猿楽伝記』。

10 飯塚恵理人『近世能楽史の研究 東海地域を中心に』（雄山閣出版、一九九九年）によれば、初代は金春流であったが途中で宝生流に転流した家で、文化年間は四世金三郎の代であった。

11 近藤恒次『賀茂真淵と菅江真澄 三河植田家をめぐって』（橋良文庫、一九七五年）所載の年譜による。同書によれば金春惣右衛門に宛てた『起請文』が存在するという。

12 安永から天明頃の『武鑑』は川合彦兵衛の居住地を「北八丁堀」とする。

13 先掲『賀茂真淵と菅江真澄』所載年譜には、「安永二年 金春流太鼓修行のため鱸萬七高栄に入門す。（誓約之文）」とある。「鱸萬七高栄」は不明の人物。吉田近辺在住の人物であろうか。

14 先掲『賀茂真淵と菅江真澄』所載年譜には安永六年末から翌年正月にかけて大坂を訪れ上田秋成らと面会した旨が記されるが、江戸へ赴いた記録は見えない。

- 15 宮本圭造編『能楽資料叢書五 近世諸藩能役者由緒書集成上』
野上記念法政大学能楽研究所、二〇一九年。
- 16 表章校訂・解説『能楽資料集成一〇 能之訓蒙図彙』野上記念
法政大学能楽研究所編、わんや書店、一九八〇年。
- 17 先掲『近世近代東三河文化人事典』。
- 18 関屋俊彦解題『関西大学図書館影印叢書三 勸進能并狂言尺番
組』関西大学出版部、一九九五年。
- 19 先掲『賀茂真淵と菅江真澄』所載年譜による。後者は『壬寅浪
華記行』に基づく。
- 20 先掲『近世能楽史の研究』。
- 21 先掲『近世能楽史の研究』。
- 22 先掲『賀茂真淵と菅江真澄』所載年譜。
- 23 山川暁「尾張徳川家の町入能」(『尾張名古屋の人と文化』金城
学院大学エクステンション・プログラム編、高橋博巳監修、中日
新聞社、一九九九年)によれば、天明二年二月に九代藩主宗睦の
大納言昇進と世嗣誕生を祝う町入能が行われたが、書状の時期と
は大きく隔たる。また宝暦十三年九月には宗睦の入国祝賀能が
あったが、植田が榮作と改名したのは安永九年の隠居後のこと
であり、これとも合致しない。
- 24 『豊橋市史第二巻 近世編』豊橋市史編集委員会編、豊橋市、
一九七五年。
- 25 先掲『賀茂真淵と菅江真澄』所載年譜。
- 26 『能狂言―豊橋魚町の面と装束―華麗なる能装束の美』豊橋市
美術館、一九九八年。
- 27 『豊橋市史第三巻 近代編』豊橋市史編集委員会編、豊橋市、
一九八三年。
- 28 鈴木梁満(享保十六〜文化十四、通称土佐、伊予)は吉田魚町
の熊野神社の神官。古市木朵(享保十二〜文化七、長兵衛)は、
魚町で現金屋という宿屋を経営していた。
- 29 先掲『賀茂真淵と菅江真澄』。
- 30 新城の能楽については、大原紋三郎『新城祭礼能番組帳解説』
私家版、一九九六年、同『新城能楽補遺』私家版、一九九八年に
よる。
- 31 田原藩の能楽については、拙稿「田原藩の能楽」『能と狂言
一七』ぺりかん社、二〇二〇年、同「田原藩の能楽(続)」東海
能楽研究会『能・狂言における伝承のすがた』風媒社、二〇一九
年による。

付記 資料の閲覧・掲載等の際し、豊橋市図書館より格別の配慮を
賜った。記して感謝申し上げる。